

2025 年度（令和 7 年度）

浦和明の星女子中学校入学試験問題
(第 一 回)

国 語

(50 分)

注 意

1. 試験の開始まで問題用紙を開かないこと。
2. 問題用紙は全部で 11 ページある。試験開始と同時にページ数を確認すること。
3. 答えはすべて解答用紙の決められたところに、はっきり書くこと。なお、解答用紙の※印欄のところは記入しないこと。
4. 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書くこと。
5. 印刷のはっきりしないところがある場合は、手をあげて係の先生にきくこと。
6. 字数制限のある場合は、句読点も一字と数えて答えること。

受験番号

〔一〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。「」内の表現は、直前の語の意味を表します。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

一九八一年、アメリカの女性作家コレット・ダウリングが著書『シンデレラ・コンプレックス』を発表した。この本は、二三か国語に翻訳されて、たちまちベストセラーとなり、大きな話題を呼んだ。もう四〇年あまり前のことだが、この本のタイトルは、いまや一般概念として定着するに至っている。

副題「女性のなかに隠された自立への恐怖」にも示されているとおり、たとえ女性が法的・社会的に解放され、男女平等が唱えられたとしても、女性たち自身のかに、自立をはばむ内的原因があるのではないかと、ダウリングは問題提起し、その原因となる概念を「①シンデレラ・コンプレックス」と名づけたのである。それは、外から来る何かが、自分の人生を変え、守ってくれるだろうという、女性自身のなかに潜在する無意識の依存願望を指す。

〔中略〕

お姫様が登場する多くの童話には、「女性は美しく素直でさえあれば、じつと待っている、白馬に乗った王子様が迎えに来て幸せにしてくれる」というようなメッセージが含まれたものが多い。そうした物語の典型が『シンデレラ』である。『白雪姫』や『眠れる森の美女』では、お姫様は眠っている、王子様が助けに来てくれる。このように女性が他者に守られ、難問を〔A〕的に解決するという物語の定型は、童話にかぎらず、しばしば大人の文学のなかにもさまざまに形を変えつつ潜んでいる。多くの女性は、こうした物語パターンを、幼いころから刷り込まれていくのである。

ジェンダー学の専門家、若桑みどり氏は、二〇〇三年、著書『お姫様とジェンダー』において、こうしたプリンセス・ストーリーが、今世紀に入ってもなお、依然として再生産され、人の心理に浸透し続けていることを、ディズニーのアニメーション映画『白雪姫』『シンデレラ』『眠れる森の美女』を題材に取り上げて、女子大生を対象として調査することにより、実証的に示した。

その後、かなりの年月が流れたが、果たしてシンデレラ・コンプレックスは脱却されたのだろうか？

まず、状況を外から眺めてみよう。現在、日本では「男女共同参画社会」というキャッチフレーズのもとで、女性が男性と同等に働きやすい社会に改革していくべきだという主張が盛んに唱えられている。この状況は、女性にはいまだ自由に羽ばたけない足枷（かぎ）があるということを示していると言えるだろう。昨今

は、女性の権利の拡張を要求するフェミニズムが、いつそう勢いを増している時代であるとも言える。既存の社会に異議申し立てをして、外からの改革を主張するものが、フェミニズムである。

〔B〕、社会という「外側」を変えていくことは、女性が羽ばたくための必須の条件だ。

〔C〕、それに劣らず重要なのは、女性が最終的に「内側」から自らを変えていくことである。社会の側の準備が整っていなければ、それだけいつそう強固な内発的意志が必要とされる。他人になんとかしてもらおうとするシンデレラ意識をまずは振り払わないかぎり、女性であろうが男性であろうが、道は開けない。女性のための社会改革さえなされれば、女性自身が即シンデレラ・コンプレックスを脱却できるというほど、事は単純な問題なのだろうか。そこで、「内側」の検討へと、話を戻そう。プリンセス・ストーリーが文化遺産のなかで存続しているかぎり、多かれ少なかれ、それは人々の心のなかに浸透するはずだ。したがって、②女性のなかにシンデレラ・コンプレックスが生じる傾向は、時代を超え、普遍性を帯びていることは否定できないように思われる。

他方、子どものころから心に深く根を下ろしている「もうひとつのストーリー」の定型によって、多くの女性たちが内から駆り立てられているという事実については、看過されがちである。それは、孤児もしくは孤児同然の恵まれない境遇に生まれ、美人でなくとも、自分の能力や人格的な強みによって道を切り開き、とりわけ学力によって頭角を現し、自己実現しながら、自分と対等な男性と互いに認め合い、よき友人となるか、もしくは結婚し、その後もライフワークを持ちながら生きる、という形のストーリーである。〔D〕、試練を乗り越えて自力で幸せを獲得するという新しいタイプの女性像を描いた物語である。

現在、社会で活躍している女性たちのなかには、この「もうひとつのストーリー」すなわち「少女の試練の物語」から生きる力を汲み上げながら人生の道を歩んできた人々が、少なくないのではないだろうか。にもかかわらず、このような「シンデローム（現象）」については、いまだ命名されていない。③せひ命名する必要があると、私は考えている。

そこでまず、こうした「少女の試練の物語」が、どのようにして生まれてきたのかということについて、考えてみたい。これらは、一九世紀終わりから二〇世紀初頭ごろ、アメリカ圏の女性作家たちによって書かれた少女小説が中心をなしているようだ。代表的な作品には、ルーシー・モード・モンゴメリの『赤毛のアン』（一九〇八年）、ジーン・ストラットン・ポーターの『リンバロストの乙女』（一九〇九年）、ケイト・ダグラス・ウィギンの『少女レベッカ』（一九〇三年）などがある。ルイーザ・

メイ・オルコットの『若草物語』（一八六八―一八六九年）、ジーン・ウェブスターの『あしながおじさん』（一九二二年）なども、やや定型から外れる部分はあるが、その一群に含めることができる。なかでも、日本で特に多くの読者層を獲得していることが国内外で注目されているのが、『赤毛のアン』シリーズである。

では、これらの物語はなぜ生まれてきたのだろうか？ 偶然的現象ではなく、何か発端があったのではないだろうか？ そこで、その源流を求めて英語圏の文学史を遡（さかのぼ）っていくと、一九世紀半ばのイギリス人作家シャーロット・ブロンテの小説『ジェイン・エア』（一八四七年）にたどり着くことを、筆者は発見した。この小説は、女主人公は美人に設定すべしという従来の文学の約束事を打ち破った点でも、女主人公自身が語り手として激しい感情を吐露（とろ）するという点でも、それまでになかった独創的な小説として、英文学史のなかで重要な位置づけをされている。

しかし、『ジェイン・エア』は、イギリスでは、シンドローームを形成するほどすぐには根づかなかった。この作品はとりわけ、海を渡って新大陸に^bニユウシヨクした英語圏の人々の子孫を中心に、アメリカやカナダの女性作家たちに、大きな影響を与えたのではないか。そして、少女を主人公とするそれらの物語には、女性作家たち自身の生き方が投影されているのではないだろうか。

以上のような仮説に基づいて、このような形のストーリーが生み出す作用や現象――すなわち、『ジェイン・エア』の影響を受けた女性作家たちが、シンデレラ・コンプレックスを脱却した新しい少女小説の世界を開拓していった現象、およびそうした作品の特色の表れ――を、「^④ジェイン・エア・シンドローーム」と名づけることを、ここに提唱したい。

〈中略〉

少女が試練を乗り越えて自分の世界を切り開くという物語は、子どものころから女性たちに大きな影響を与え、根強いシンデレラ・コンプレックスから脱却するための助けともなる。とりわけ潜在的能力の高い少女にとっては、そうした物語との出会いがもたらす効力は計り知れなく、一生を推進する「起爆剤」にもなりうる。したがって、ジェイン・エア・シンドローームは、決して軽視することのできない、注目すべき文学的現象であると言えるだろう。

ただし、ジェイン・エア・シンドローームは、女性をめぐる問題を解決する万能薬ではない。他方でそれは、シンデレラ・コンプレックスを乗り越えられない女性への蔑視や優越感、あるいは能力偏重主義（^{へんじゅうしぎ}）を生み出し、競争心を煽（あお）るといふ「副作用」を伴うこともありうる。

〈中略〉

重要なのは、シンデレラ・コンプレックスも、ジェイン・エア・シンドローームも、ともに無意識の状態から解き放つということである。それらの現象が女性の心理、ひいては生き方にまで根強い影響を及ぼしうるということを、まずは正しく認識することが、問題解決への第一歩となるだろう。

念のため断っておくが、これはシンドローーム一般に言えることで、女性に限ったことではない。文学は、影響力が大きいからこそ、すばらしい。しかし、影響を受けている自分を客観的に引き離して見ることができなければ、^⑤それはあらゆる方向へと引つ張（ひき）っていく呪縛（じゆわく）ともなりかねないし、逆に、たんにノスタルジーに浸（ひた）って愛好するだけの消費の対象に成り下がって終わることもあるだろう。その結果、当の文学作品を正當に評価することができなくなるのは、実に残念なことである。

真に男女平等が実現した社会では、ジェイン・エア・シンドローームは消えていく運命にあるのかもしれない。では、その先にある新しいストーリーの形とはいかなるものだろうか？

それは、ジェンダーの区別を廃して、これまでの普遍的なテーマを現代世界のなかで追究していく物語ではないだろうか。もはや少女ゆえ少年ゆえ生じる問題ではなく、ひとりの人間としてさまざまな苦難に出会った子どもたち――とりわけ大人の世界から押し付けられた不条理により困難な状況に置かれた子どもたち――がいかにして心の悩みを克服し、自分の生きたい道を求めて突き進んでいくか。そこに光を当てることによって、子どもに感動と勇気を与え、文字どおり「生きる糧（かて）」となる物語ではないだろうか。問題解決の糸口は、超自然的な「魔法」の力に頼ることではなく、自身の決断と、他者との関係を形成していく力にあるという脱シンデレラのメッセージは、本書で取り上げたすべての少女小説のなかにも見られた。また、ゴッデンの『木曜日の子どもたち』では、女の子のほうが男の子よりも優先されるといふ、従来とは逆転した設定により、ジェンダーの問題が消えていく方向性がすでに示唆（しきさ）され（「ほのめかされ」）ていることも、本書で見たとおりである。

お伽話（おとぎばなし）や児童文学は、子ども向けの読み物として軽く見られる傾向があるが、もつとその価値が強調され、再評価されるべき領域である。未来の可能性ある子どもに大きな影響力を持つという点では、成長の少ない大人が楽しむための文学よりも、ずっと大切な存在であると言ええるだろう。

〈中略〉

そもそも文学には、子ども向け・大人向けという境目はないはずだ。「お伽話」「児童文学」「少女小説」といった呼び名は、大人によって作られた分類にすぎない。本来大人の小説とされる作品のなかでも、子どもが読める物語はたくさんある。少な

くとも、子ども時代に『ロビンソン・クルーソー』、『ジェイン・エア』、『^{がんくつ}巖窟王』(『モンテ・クリスト伯』)、『狭き門』、『若きウエルテルの悩み』などを愛読していた私は、大学生になって再読するまで、これらが大人の文学であるということを知らなかった。

一般に、子どもは驚くほど文学を理解する能力を持っている。また、大人は、子どものときに読んだ文学を再読すれば、新たな発見をすることができる。物語には、幼いころから持続的に人の一生に作用する豊かな、そして大きな力が秘められているのである。

(廣野由美子『シンデレラはどこへ行ったのか——少女小説と『ジェイン・エア』』)

問1 太線部 a「潜(んで)」・b「ニユウシヨク」について、aは読みをひらがなで答え、bは漢字に直しなさい。

問2 傍線部①「シンデレラ・コンプレックス」の説明として適切でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 女性たちが幼い頃から自分の意志とは無関係に担^{にな}わされてきた役割に対する反感のこと。

イ 女性たちが社会の中で自立していく際に、自らその可能性を押しとどめる要因となるもの。

ウ 困難に出会った時に誰かに助けてもらいたいという、女性たちが持つ、何かにすぎる考えのこと。

エ 幼い頃からお伽話^{とぎ}として聞かされ、女性たちが心の中に理想の型として植え付けられてしまうもの。

問3 空欄Aに入る最も適切な語を次から選び、記号で答えなさい。

ア 具体 イ 徹底 ウ 受動 エ 客観

問4 空欄B・C・Dに入る最も適切な語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア さらに イ しかし ウ つまり エ もちろん

問5 傍線部②「女性のなかに()思われる」と筆者が考える理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 女性の権利の拡張が要求された現在では、女性の地位の向上に伴い、責任の重さに耐^たえられない人々も出てきてしまったから。

イ『シンデレラ』は、女性が男性から守られるという理想的な童話であり、女性なら誰もがあこがれる話となっているから。

ウ『シンデレラ』のような童話は、世代を超えて受け継がれており、多くの人々の中に定型として根付いているから。

エ 誰かに助けてもらえるという話の定型は、男女ともにあてはまるものであり、性別を超えた共通性があるから。

問6 次は、傍線部③「ぜひ命名する必要がある」と筆者が考える理由を説明した文です。空欄に共通して入る最も適切な語を2ページの本文中から漢字二字で抜き出し、答えなさい。

命名することによって今まであいまいにしか されていなかった女性の生き方を、一つの型としてはっきりと することができるようになるから。

問7 傍線部④「ジェイン・エア・シンドローム」に対する筆者の考えとして適切でないものを次から全て選び、記号で答えなさい。

ア この現象は、シンデレラ・コンプレックスの呪縛^{じゆばく}に生きづらさを感じてきた女性にとつてはありがたいものだが、男性には不安を与えている。

イ この現象への理解をひとつの切り口とし、自分の心理や人生の選択がどのような思考から生じているのかを客観的に見ていくことが大切だ。

ウ この現象が人々の心理や生き方にどのような影響を与えるかを考えていくことは、文学作品の価値を正しくとらえることにもつながる。

エ この現象は、全ての女性が自立して人生を開拓していく上での希望を生み、蔑視^{べし}されてきた女性の生きづらさを解決してくれる。

オ この現象は、能力を発揮^{はつ}できない人々にとつてはかえって生きづらい状況を生み出しかねず、必ずしも万能とは言えない。

問8 傍線部⑤「それはあらぬ方向へと引つ張っていく呪縛ともなりかねない」について、「あらぬ方向」の例を次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間は、物語の登場人物との出会いや対話を通して変化し続ける存在なのだと考えるようになること。

イ 仕事で高い収入を得ている女性は、収入の低い男性よりも社会に貢献していると思うようになること。

ウ 好きな物語に登場する主人公の容姿にあこがれ、そっくり同じ服装や髪形にしたいと思うようになること。

エ 人間の価値は、その人の外見や性格ではなく、意志の強さだけで決まるものであると信じるようになること。

オ 現代に生きる自分たちが、気付かないうちに持ってしまったっている考え方の偏りを自覚するようになること。

問9 本文の内容の説明として適切なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 理解力が育っていない子どもに大人の偏った考え方を刷り込まないように、子ども向けの本と大人向けの本の線引きを明確にすべきだ。

イ 女性が白馬の王子様を待ち望み、それを幸せの鍵とする物語は童話に特有の型であり、それだけに子ども時代に読む本は慎重に選ぶべきだ。

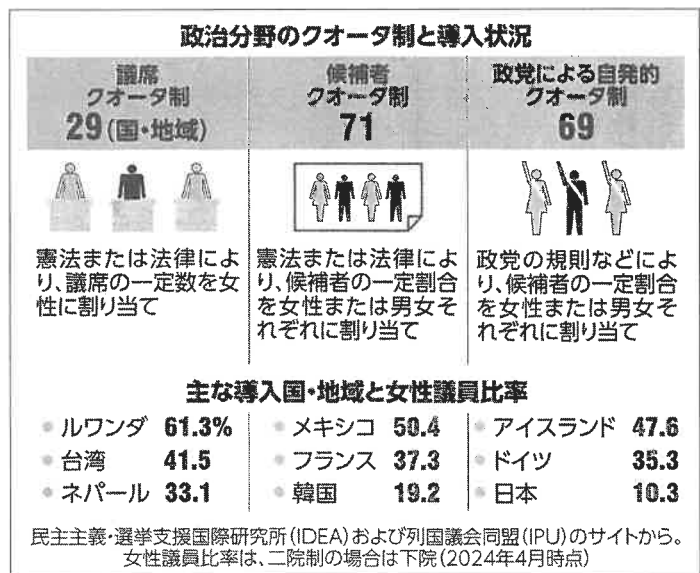
ウ 男性優位の現代とは反対のジェンダー状況を描いた作品も生まれてきており、将来「ジェイン・エア・シンドローム」が消えていく可能性はある。

エ 他者からの働きかけによって自分の人生を変えてもらおうとする意識は、時代や場所を問わず女性に特有のものであり、男性には無縁の発想である。

オ お伽話や児童文学から受けとった考え方は、その後の人生にも影響を与え続けるものであり、自分が受けている影響を客観的に認識すべきだ。

問10 次の【資料】を読み、後の問いに答えなさい。

【資料】



(二〇二四年六月十三日木曜日「朝日新聞」朝刊)

(1) 【資料】中の「クォータ制」とは、候補者や議席の一定の割合を女性に割り当てる方式です。このように女性の地位の向上を目指す運動を本文中では何と呼んでいますか。最も適切な一語を1ページの本文中から抜き出し、答えなさい。

(2) 「クォータ制」のような方式が導入されている現状に対し、筆者はどのような考えをもっていますか。その考えが示されている最も適切な一文を1ページの本文中から抜き出し、始めの五字を答えなさい。

(3) 次は、本文と【資料】について学んだ明子さんの感想です。空欄に入る最も適切な表現をそれぞれ指定の字数で答えなさい。ただし、A・C・Dは1ペー
ジの本文中から抜き出し、Bは自分で考えてひらがなで答えること。

本をたくさん読めば、多様な生き方に触れられるものだと思っていた。
でも、それらの作品によって、自分の生き方が「(A 三字)」のうちに、
ある方向へと導かれている可能性もあると分かり、驚いた。確かに、結
婚すれば私は幸せになれる、というよりは、幸せに「(B 六字)」
だろうと、ぼんやりとだが期待していた。私の中にも「(C 五字)」
意識」があったのだと気づいた。

また、資料にある「クオータ制」のような制度の存在を初めて知った。
画期的だと思いつつも、女性だからという理由で優遇されることには正
直、抵抗もある。このような方式を活用し、「外側」を変えながらも、私
たち自身も、目には見えない「(D 五字)」の力を一層高めていくこ
とが何よりも重要だというメッセージを感じた。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。「」内の表現は、直前の語の意
味を表します。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

「勉強がイヤだったことは一度もないな、おれ」

ルイのことはよくはおどろいた。「こういうやつなんだ」と輝は笑った。

「ほんとだよ」と胸を並べ直しながらルイは言った。

「コーガンザイで頭がボツツとして、呼吸器とかしてるときは何もできなくなるん
だよ、体も痛いし、苦しいし。勉強できるのは、脳が活発に動いてる証拠でしょ」
ルイの話を聞きながら、よくはどんな顔をすればいいかわからなかった。

さらっと口にした「コーガンザイ」ということばにドキツとしたのだ。

二年前を思い出す。ルイの見た目はあの友だちに似ている。ニット帽は髪かみのぬけ
た頭を隠すため。ふくらんだほっぺは薬のせいだろう。確か、ムーンフェイスとい
うのだ。

病氣の話をされると反応に困ってしまう。でも、ルイは平気そうな顔で続けた。

「おれ白血病なの。ここじゃめずらしくもないよ」

長期入院の子供には小児がん、中でも白血病の子が多くいるとお父さんから聞い
た。そのひびきには不吉なものを感じた。死んだ友だちも白血病だったのだ。

「透くんとほの病氣は何？」ときかれ、よくは正直に打ち明けた。症状を説明して、「二
百万人に一人の難病なんだ」と付け加えると、ルイは笑った。

「すごい、超レアじゃん」

からかうような反応にぼくはムツとした。

「何もうれしくないよ、カードじゃないんだから」

「だいじょぶ。きつと治るよ」

「わかんないじゃん、そんなの」

きつと治る。学校の同級生や大人に言われてきたはげました。やさしさだとはわ
かっていても、何度も聞かされると、無責任な言い方に思えた。とりあえずそう
言っておけば、はげましになる。そんな軽い気持ちで言っているんだろうと。

「治るって信じなきゃ、失礼だよ」

ルイの口から出たのは、思いがけないことば。ぼくをじっと見る目は真剣だった。
「先生も看護師さんも、親とかもさ、みんな、おれたちが治るって信じて世話して
くれるんだよ。なのに、治るって自分で信じないのは、失礼だよ」

ぼくは言い返せなかった。① 感心してしまった。確かに頭のいい子だ。
「おれのも治る？」

輝の病気は、ジェフビッチ症候群という、聞いたことのないものだった。体の中を流れる血の成分が正しくつくれず、血管の中に余分なものがたまってしまい、そのせいで体が苦しくなる病気だそう。輝はよくが入院する一ヶ月前からこの病院にいて、よくと同じように、いつ退院できるかわからないらしい。ときどきとてもだるくなったり、高熱が出たりするというのは、多くの症状とよく似ていた。

「治るよ」

② ルイより先に、ぼくは答えた。急に照れくさい感じになったけれど、笑顔の輝を見て、言っただけだったと思った。

二人とのチェス（ボードゲームの一種）が、その日から多くの日課になった。

ぼくよりも瑠偉は強く、瑠偉よりも輝は強かった。ラウンジでテーブルを囲むほかたちを見て、ほかの子も興味を持ち始めた。五歳の子にルールを教えたり、中学生の人と対局したりする体験はすごく新鮮だった。輝はよくにいろんなテクニックを教えてくれた。

オープニングの形や詰め方の基本、有利な戦い方などなど。

チェスの定跡（じようせき）の名前はアニメの必殺技みたいでかっこいい。「シシリアンディフェンス・ドラゴンバリエーション」とか、「アクセラレイテッド・ロンドンシステム」とか、ちよつとした組み方にもカッコいい名前がついている。きわめつけには、「フランケンシュタイン・ドラキュラバリエーション」なんてものまである。

「輝はすごいね、いろんなやり方覚えてて」

ぼくのベッドで、ほかたちはあぐらをかいてチェス盤（ばん）をはさんだ。どんな風に攻めても上手にかわされてしまう。③ 負けるくやしさと、輝の強さへの①が半々だ。

「自慢みたいだから言わなかったけど」

輝は言った。「おれ去年、関東のジュニア大会で優勝したんだ。中学生も参加するやつで、五十人くらいいてさ。今の教室も、大人と子供で二十人くらいいるんだけど、おれより強いのは先生と、大人と、高校生の人くらい」

今度は④びっくりする気持ちが半分、②気持ちが半分だ。それなら、いくら負けが重なっても仕方ない。

「輝に勝てたら、ぼくはその大会で優勝できるってことだ」

「まあ、そうだね」

余裕な感じで輝は笑う。大きい目標ができたと思う。輝に勝てれば病気も治るんじゃないかと、ぜんぜん関係ないことが頭の中でつながる。そんなことを話

すと、「じゃあ負けてやるよ」と輝は言った。

「それは絶対だめ」

うそで勝っても意味はない。実力で輝に勝つ。大げさかもしれないけれど、生きる目的、みたいなのが、見つかった気がした。

みんなが寝静まった病室で、ぼくは考えた。学校のクラスみんなは、いつか大人になるのを当たり前と思っている。だれかに約束されたわけでもないのに、当然だと感じている。だけど、それはぜんぜん当然じゃない。赤ちゃんでも幼稚園児でも小学生でも、大人になれずに死んでしまう子がいる。昨日の夜まで元気だったのに、次の朝から永久に目を覚まさなくなった子も見たことがある。

ぼくだってそうなるかもしれない。

二分の一人式というのを今年の初めに学校でやった。成人は二十歳だ。ぼくは二十歳まで生きられないかもしれない。本当の成人式を迎えられるか、まったくわからない。

「チェスってザンコクなゲームだと思わない？」

食堂での夕ごはんのとき、ぼくは言った。輝と瑠偉は目を見合わせて首をかしげた。「将棋（しょうぎ）だと、取られた駒を取り返したり、相手の味方にしたりできるでしょ。でも、チェスは一度取られたら終わりじゃん。駒は生き返らない」

将棋との大きなちがいは、将棋の駒は死なない。けれど、チェスの駒は死ぬ。三手目でチェックメイトになるみたいに、急にすべてが終わることもある。

「その分ね、駒が背負うものが大きくなると思うんだ」

駒の数は一方的に減っていく。キング以外の味方の駒が、ポーン一つだけなんて場面も出てくる。頼りになるルークも、最強のクイーンも全部いなくなった場所で、いちばん弱つちい兵士が勝負のカギをにぎるのだ。

生き残った駒は、いなくなった仲間の命を全部背負って、敵に挑んでいく。

将棋にはない⑤ダイゴミみたいなものを感じた。ぼくがそういう話をしたら、「考えたこともなかったな」と瑠偉はごはんを口に運びながら言った。

「透（とお）ってね、たまに⑥変なこと言うんだぜ」

輝は言った。看護師さんの目を盗み、苦手なほうれんそうのおひたしをこっそりとぼくの皿に移すのだった。「ロビーでおばさんたちが、ゲノー人のフリンの話で盛り上がったんだ。そしたら、大人って面白いことがわかってないねって言うの」「人のうわさなんか話しても仕方ないでしょ。チェスなら自分の力でどんどんうまくなれるのに」

「どっぷりはまったね」瑠偉は大人っぽくクールに笑い、さばのみそ煮をばくりと

口に放り込んだ。変なことを考える、というのは学校でもたまに言われた。宇宙の始まりはビッグバンだというけれど、そのエネルギーは前の宇宙がギュッとしぼんだものじゃないかとか、カニはおいしいのにザリガニはどうしておいしいのかとか、ひとりですつと考えたりした。動けない時間が多い分、もしかしたら学校のみんなよりも、じつと考えるのだけは得意かもしれない。

「透は強くなると思うよ」

夕ごはんのあとで手を洗っているとき、輝に言われたのがうれしかった。「変なことを考えるやつは、人の思いつかない手を思いつくだろ。考えながら集中力もつくし」

なるほど、そうは考えなかった。やつぱり輝はするどいやつだ。

ぼくたちは次の日も、また次の日もチェスを指した。変な言い方だけど、生きることは楽しいな、と思った。

一方で、残念なこともある。

瑠偉の症状が悪化して、ムキン室に入ってしまった、なかなか会えなくなったのだ。調子のいい時間は勉強にあてたいからと、チェスの相手も断られた。もしかしたら、瑠偉もぼくと似たようなことを考えているのかもしれない。受験に合格することで、病気にも勝とうとしているんじゃないだろうか。けれど、もしも瑠偉の病気が、受験をあきらめなくちゃならないほどひどくなったらどうしよう。

そもそも、受験まで生きられなかったら。

ベッドの中で眠れないと、イヤな想像がふくらんでしまう。それをふせぐにはチェスを指しまくるのがいい。攻め方や守り方を夢中で考えていると、頭がつかれる。頭がつかれると、夜はすぐに眠れる。スポーツのあとみたいに気持ちのいい疲れがある。

チェスはまさにスポーツなのだ。輝が教えてくれた。

「オリンピックの組織が認めてるんだぜ、公式に」

公式に、という部分を強めるように輝は言った。輝パパも言っていたからきつと間違いない。

「オリンピック種目にしようって動きが、昔からあってね」

輝パパはチェスのことを何でも知っていた。「日本が大正の頃から、ヨーロッパでそういう活動があったのさ。いつかは正式種目^{たいていよう}に選ばれるかもしれないんだよ」

大正時代は、おじいちゃんが生まれるより前だというから驚きだ。「でも、スポーツっぽくないね」とぼくが言うと、^⑦二人は何か思いついたように笑った。何をす

るかと思えば、駒を次々に動かして、信じられないスピードで対局を進めてみせた。そのようすは卓球の試合のようにも、すごい速さでパス回しをするバスケのようにも思えた。

一手ごとの動きを瞬時に判断する「早指し」というやり方らしい。

ぼくにはとてもできないけれど、チェスが好きになった理由がもうひとつわかった。

ぼくが知っていたスポーツだけがスポーツじゃないのだと、ぼくは知った。ラウンジで、ぼくのベッドで、輝のベッドで、時間を忘れて対局を続けた。

輝に駒を少なくしてもらい、やつと^⑧互角になった。話すこともなくなつて黙々と指しているうち、感じたことのないような、なんと言い表すのかわからない気持ちになった。かわすことばは少ないのに、一局ごとに仲良くなれる気がした。

輝が駒を動かすたび、何を考えているのかをぼくは必死で考える。頭の中をのぞきこむような感覚になる。チェスは心理戦だと、輝は教室の先生に教わったという。チェスを通して、輝の心をのぞく。そんな時間が楽しくて仕方なかった。

熱が出て吐き気がして、すごく苦しい日もある。だるくて体が動かせない日もある。

辛いときはふとんにくるまり、輝のことを考える。

輝はしいたけがきらいだ。「はつきりしない歯ごたえがイヤだ」と言った。

はつきりしないのがきらいなら、ねらいの見えない手であせるかもしれない。

輝は棚の本をきれいにととのえる。まちがった文字はていねいに消す。

駒の数を減らして盤面をすっきりさせ、考えをしぼるのが好きなのだ。

だったらぼくは駒の交換をさせて、ペースをみだしてやればいい。

輝は算数が得意で、計算問題を解くのがぼくより速い。

早く指すことでこつちをあせらせるのも、あいつのテクニクだ。

ならばぼくは、相手をたくみに誘い込むトラップを研究してみようか。

指し方をあれこれ想像していると、ふとんの中でも退屈さが減った。

ようやくぼくの体調が戻っても、今度は輝がダウンするときもあった。

ホーシヤセンリョーホーと強い注射のせいでアンサーにしないでほならず、チェスも看護師さんに止められた。

⑨ ぼくも同じ日に注射してほしいとせがんだら、「それぞ

れのペースがあるのよ」としかられてしまった。輝が指せないうちに強くなつてやろうと、ぼくはほかの子と対局したり、ひとりでタクティクス問題「チェスの練

習問題」を解いたりした。

そうして入院してから三ヶ月がたったころ、とうとうチャンスが来た。

「やられたな」

輝は下くちびるをかんて、くやしそうにつぶやいた。一方のぼくは、今までにない有利な局面にハラハラしていた。対局の中盤、ぼくの黒いクイーンが、ルークとともに白のキングを追い詰めたのだ。離れた位置のビショップもキングに狙いをつけていて、輝の王は隅っこのマスに逃げるしかない。駒落ちハンデなしの勝負。連敗記録が百を数えるぼくにとつて、センザイイチグーの大チャンスだ。

「やばいな、負けるかもしれない」

ぼくのベッドの上で、輝はうで組みしながら体を前後に揺する。浮かれそうになるけれど、油断は禁物だ。最も難しいのは、勝てそうな試合を勝ち切ること。ラスカーというプレイヤーの名言だという。輝のキングが逃げたら、ぼくは次にどうする？

考えているうちに、輝はキングではなく、そばのルークを動かした。攻めに転じる気なのだろう。怖いマスじゃない。気にしなくていい。

メイト(チェックメイト)は目の前なのだ。クイーンでポーンを取つてしまえば。

右手を伸ばしたとき、突然に息が苦しくなった。胸を押さえて呼吸をととのえたら、今度は吐き気におそわれた。全身が言うことをきかなくなった。

「おい！ 透！ 大丈夫か！」

前に倒れる。チェス盤に頭がぶつかる。胸がバラバラになる。

〈中略〉

気がついたとき、いつもの病室とはちがう場所にいた。口と鼻を人工呼吸器におおわれていた。うでに点滴がささっていた。ベッドに横たわるぼくはいろんな機械に囲まれて、頭にも何かが巻かれている。たぶん、いくつものコードがのびているはずだ。

呼吸器の独特なおいで、三年生のときのことを思い出す。

PICUに運ばれた、とわかった。小児集中治療室というやつだ。

「透、わかる？ わかる？」

すぐそばで声がした。お母さんだった。目に涙がたまっていた。ほっぺがぬれていた。

両手でぼくの右手をにぎっていた。じんわりと体温が伝わってきた。

「ああよかった！ ありがとうございます！」

何がよかったっていうんだ。

となりに羽田先生がいた。お母さんの肩に手を置き、ぼくの顔を見てほほ笑んだ。

「がんばったね透くん」

そう、ぼくはがんばった。がんばって、あと一歩で輝に勝てた。それなのに。まだ胸が苦しい。呼吸に集中して、ゆっくりと息を吸う。吐く。吸う。吐く。吸う。吐く。うでを動かそうとしても、手の指先さえも自由にはならない。

目がさえて、はじめに感じたのは強いイライラだった。この場所に来たということ。それはつまり、入院が長引いてしまうということ。前もそうだった。最悪だ。

「二週間はPICUにいたくちやいけな」と羽田先生は言った。

そのあいだは、輝のいる一般病棟へは行ってはいけな。

突然の発作。今回は足だけでなく全身。全身どころか、呼吸さえも止まりかけた。

「発見がおくれていたらとても危険な状態になっていた」と羽田先生は話した。

いつそのこと、危険な状態になればいいと思った。病気が全部治って、完全に健康になるまで、ずっと眠っていたほうが気楽だ。見える風景は三年生のころと変わらな。二つも学年が進んだのに、あのときと同じながめだ。ベッドの両側はカーテンで仕切られている。正面は開いている。PICUはひとつの広い部屋で、向こうには横ばいの長いカウンターが見えた。看護師や医者の人たちが何人も働いていた。

「入院中は何もしなくていいから楽だよ」と言ってきた同級生のことを思い出す。だったら入院してみろ。何もできないのがどんなに苦しいか教えてやる。

やっぱり病院はイヤだ。早く出たい。こんな場所にはもういたくない。

「お父さんといっしょにね、遠足のコース回ってきたの」

PICUに入って何日かしたあと、お母さんはビデオカメラを持ってきた。ベッドの横の小さなテレビと接続すると、画面にお父さんが映った。

「退院したら、ぜったい連れてってあげる。ほら、これが自然博物館」

今度はお母さんが映り、白いかべを背に笑顔で手をふった。

「館内撮影は禁止なんですけど、事情を話して、特別に許してもらったの」

お母さんとお父さんは、二人で博物館の中を見て回っていた。巨大な恐竜の骨格やかべ一面にずらりと並ぶ昆虫の標本、熱帯林を再現した部屋などが順々に映された。二人はかわりばんこでカメラを持って、展示物をいろいろと説明していた。

海浜公園では親戚のおじさんも合流した。おじさんが撮影役だった。バーベキューをするお母さんとお父さんが映り、画面の中の二人は何度もぼくをばげました。

お母さんは遠足コースだけでなく、学校にも行ったらしい。

別の日にはクラスの子のビデオメッセージを、また別の日には学校のようなすを細かく書いた手作りの冊子を持ってきてくれた。担任の先生にインタビューしたり、

参観日のように授業を見せてもらったりして、くわしいレポートを作ったという。

お母さんのやさしさがⅢ。同じくらいに、Ⅳ。

ぼくが健康だったら、こんな面倒をかけなくてすむのに。

けれど、もしそんなことを言ったら、お母さんはきつと悲しむ。

うまく感想を言えないまま、ぼくはテレビに映るビデオを、何度も観返していた。

「お父さんとチェスやっているとなんだか気楽。ビシヨップをエフシックス」

面会に来たお父さんとぼくはチェスを指した。

手足が動かないので、口で駒の位置を伝えた。

「おまえが楽しいなら、いくらでも付き合うさ」

お父さんもチェスを覚えてくれた。上手さは今のところ五分五分。でも、大人はやつぱり注意力がある。なかなか駒のただ取りをさせてくれない。お父さんがやり応えのある相手で、ぼくはうれしかった。

「チェスしていると余計なこと考えなくていいんだ。病気のこととか、学校のこととか、学校は余計っていうか、うん、なんか、行きたいなとか考えちゃうから。そういうのを全部忘れられる、えっと、ルークジーファイブ、ポーンをテイク」

「お母さんも強くなってるぞ。お父さんには勝てないけどな」

二人は家でチェスを始めたらしい。だけど、ぼくはお母さんと指す気にはなれない。

きらいだからじゃない。世界でいちばん好きだ。

だからこそ、勝負はしたくない。

勝った負けたのいらない、特別な場所にいてほしい。

「早く退院したい。学校でみんなにチェスを教えない」

ぼくが言うと、お父さんは手の動きを止めた。馬の形をした駒の頭を、指先でとんとたたいた。盤を見つめて、考えこんでいる風だった。

「いいんじゃない？ その手で」

ぼくは言った。「ナイト逃がしたほうがいいよ。お父さんのほうがピース少ないし」

「ああ、そうだな」

お父さんはナイトを安全なマスに動かした。「入院期間の、ことなかだけどな」

「うん」

「先生から説明してもらうけど、今回はけつこう長くなるかもしれない」

「長くって、一年くらい？」

「一年と、何ヶ月かかるかもしれない。今日から数えてだ。手術も必要になるかもって」

ナイトがどいて、ビシヨップの道が開く。孤立ポーンをただ取りできる。何も考えないようにしようと思った。今考えるべきなのは、この勢いでルークもうぼうことだ。

「ぼくは、院内学級で、中学生になるの？」

もう小学校には行けないの、とは言わなかった。言いたくなかった。

「今はわからない。透と同じ病気の人は、だいたい長く入院する場合も多いらしいんだ。将来のことを考えると、今のうちにしっかりと病気を治さえるのが大事なんだよ」

それ以上は何も質問しなかった。自分もお父さんも、辛くなりそうだった。

お父さんは落ち着いて、ルークを逃がした。

「いいよ、チェスできる時間が増えたと思えば」

「強いな、透は」

PICUで面会できる時間は一般病棟よりも短い。お父さんと二局を指し、一勝一敗だった。「もつと強くなるよ」とぼくは言った。

【X】は強くなれるかどうかわからない。せめて、【Y】だけはどこまでも強くなりたい。

体が思うように動かなくても駒は動く。学校の誰よりもスポーツマンになってやる。

次の日、「小学校のうちは長いこと入院生活になる」と羽田先生に聞かされた。

ぼくの病気には確実な治療法がない。発作が起らない体をつくるには、発作の出来ない期間をできるだけ長くして、神経が丈夫になるのを待たねばならない。病気の原因に対し、自分が病気の原因であることを完全に忘れさせなくちゃいけないと先生はたとえた。セーケツな環境、規則正しい生活、注射や飲み薬による治療、体系的な検査を行いながら、院内のリハビリセンターで運動を行う。

そのくらしの中で、体の成長を待つ。

「それがいちばん正しくて、ただひとつの治療法なの」と羽田先生は言った。

「チェスはやつてもいい？」

ぼくの痛切な願いだった。禁止されてしまったら、病気を治せる自信がない。「楽しく過ごすのは、治療のヒケツだね」先生は笑ってうなずいてくれた。

問1 太線部 a 「禁物」・b 「発作」について、漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問2 傍線部①「感心してしまった」理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ルイの言葉が、それまでの友だちどうしの冗談のような内容から急に大人びたものになったことに衝撃を受けたから。

イ ルイの言葉が、自分がこれまで心の中で考えていたことをうまく言い表したものであったため、その優秀さにとっても驚いたから。

ウ ルイの言葉は、これまでの人々と同じような無責任なものだと思っていたが、反対に周囲の人々を支えるものであると気づいたから。

エ ルイの言葉は、励まし^{はげ}の形をしたその場しのぎのものだと思っていたが、治ると信じて向き合ってくれている人への敬意だと知ったから。

問3 傍線部②「ルイより先に、ぼくは答えた」とありますが、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ルイの大人っぽい発言にあこがれを抱き、自分もはやく大人に見られたいと思ったから。

イ ルイの考えに「ぼく」は深く共感し、輝に治ると信じてほしいという思いがこの瞬間にあふれ出たから。

ウ 病気の仲間の気持ちを第一に考えるルイの発言に、自分も仲間を励ます人間になりたいと思ったから。

エ 輝の気を引きたい「ぼく」は、ルイに先手を打たれる前に自分が輝のことを励ましたいと強く思ったから。

問4 傍線部③「負けるくやしさと、輝の強さへのⅠが半々だ」、④「びっくりする気持ち半分、Ⅱ気持ちが半分だ」の空欄Ⅰ・Ⅱに入る最も適切な表現を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 安心 イ 感心 ウ ねたみ エ あきらめ
オ ほつとする カ 疑わしい キ がっかりする ク 頼^{たの}もしい

問5 傍線部⑤「ダイゴミ」の「ミ」に当てる漢字として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 味 イ 美 ウ 身 エ 見

問6 傍線部⑥「変なこと」とは、ここではどのようなことを指しますか。7ページの本文中から「――」のようなこと。」に続く形で八字で抜き出し、答えなさい。

問7 傍線部⑦「二人は――笑った」時の二人の心境は「（ ）心（ ）心」という四字熟語で表すことができます。空欄に入る適切な漢字をそれぞれ答えなさい。

問8 傍線部⑧「互角」と同じ意味で用いられている表現を9ページの本文中から四字で抜き出し、答えなさい。

問9 傍線部⑨「ぼくも同じ日に注射してほしいとせがんだ」とありますが、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア チエスの対局を通して親友となった輝に対する友愛の気持ちから、治療の痛みや苦しみも二人で分かち合いたいと思うようになったから。

イ 自分と輝の治療のペースをそろえることで二人の体調が良い時期を合わせ、チエスの対局をする機会を少しでも多くしたいと考えたから。

ウ 輝と同じ日に注射を受けることで輝のつらさや苦しさへの理解を深められ、チエスで輝に勝つためのヒントを得られると思ったから。

エ 自分と輝とでは注射後に体調が悪くなる期間が違うことを利用して、輝がチエスをできない間に少しでも強くなろうと考えたから。

問10 本文中のカタカナ表記についての説明として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「瑠偉」を「ルイ」（5ページ）と表記しているのは、まだ相手のことを良く知らない「ぼく」の意識を表している。

イ 「ゲノノ（人）」「フリン」（6ページ）は、小学生がまだ使ってはいけない言葉だという「ぼく」の認識を表している。

ウ 「ホーシャセシリョーホー」「アンサー」（7ページ）は、やりたいことを邪魔するものであるという「ぼく」の後ろ向きな気持ちを表している。

エ 「センザイイチグー」（8ページ）は、小学五年生の「ぼく」にとって漢字表記が難しいことを表している。

問11 空欄Ⅲ・Ⅳに入る語の組み合わせとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア Ⅲ：悲しい Ⅳ：ほこらしい イ Ⅲ：つらい Ⅳ：恥ずかしい
ウ Ⅲ：ほこらしい Ⅳ：つらい エ Ⅲ：うれしい Ⅳ：悲しい

問12 空欄X・Yに入る最も適切な語を9ページの本文中からそれぞれ抜き出し、答えなさい。

問13 次は、本文を読んだ生徒の会話です。これを読み、後の問いに答えなさい。

明子 この話を最初に読んだ時、なんでチェスなのかと不思議に思ったのよね。

星子 チェスは沈黙のうちに相手の手の内を深く読む必要があるゲームだから、その点がテーマに合っていたんじゃない？ ゲームを重ねるうちに相手との距離を縮めていけるところがさ。本文にも「(1)」って、「ぼく」の思いが書いてあったね。

明子 でも、それだけなら、将棋やオセロでもよかったということになるわよね。チェスの「(2)」というルールが鍵なんじゃないかしら。

星子 なるほど。そう考えると、作品で描かれている入院中の仲間たちとチェスとの重なりが、必然性をもつて見えてきた！ たとえば、「(3)」という「ぼく」の言葉は、「死んだ友だち」を意識した上での発言だととれるよね。彼らの分まで闘^{たたか}うんだ、という「(A)」感すら伝わってくる。

明子 そう考えると、チェスの戦いはもはや単なるゲームを超えて、命がけで生きる姿勢そのものを象徴しているのかも。まさに「(B)」勝負」って感じ。

星子 瑠偉にとつての「(4)」は、「ぼく」にとつてのチェスの戦いと重なる部分があるね。

明子 確かに、「ぼく」はチェスに向き合うこと、瑠偉は「(4)」に挑むことを通して、生きる目的を見つけているようなね。

星子 ところで、この後「ぼく」はどんな入院生活を送っていくんだろう？

明子 自分と向き合い、敵を知り、「(A)」を帯びて敵に挑むチェスの戦いを通して、自分の病気の治療にも、もつと「(C)」的な姿勢で向き合うようになる予感がするなあ。

(1) 空欄1に入る最も適切な一文を7ページの本文中から三十字以内で抜き出し、始めの三字を答えなさい。

(2) 空欄2に入る最も適切な表現を6ページの本文中から八字で抜き出し、答えなさい。

(3) 空欄3に入る最も適切な表現を6ページの本文中から二十三字で抜き出し、始めの三字を答えなさい。

(4) 空欄4に入る最も適切な語を7ページの本文中から二字で抜き出し、答えなさい。

(5) 空欄A・B・Cに入る最も適切な語を自分で考え、それぞれ漢字二字で答えなさい。

国語

解答用紙

受験番号

得点
※

※	※	※	※	※	※
---	---	---	---	---	---

問10		問8	問5	問2	問1
(3)		(1)			a
C	A				(んで)
			問6	問3	
	B	問9			b
		(2)	問7	問4	
				B	
D					
				C	
				D	

※	※	※	※	※	※
---	---	---	---	---	---

問13				問10	問7	問6	問3	問1
(5)	(3)	(2)	(1)					a
A					心			
							問4	
				問11			I	
B					心			
	(4)				問8			b
				問12			II	
C				X				
							問5	
					問9	ようなこと。		問2
				Y				